

海 (かいし) 市 No. 21

● 詩

- 02 前田 勉 願いごと
06 横山 仁 生活の柄 (16)

● エッセイ

- 08 細部俊作 幸田文の「木」を読んだ
12 佐藤ただし 水田とツバメ (19)
15 横山 仁 雑記 (21)

願ごらいふ

前田 勉

過ぎようとすることに抗っている
ということでもなく

ただぼつねんと

意味もなく

時間の流れの中に佇んできた

その声を

あなたも耳にしたか

小声で

復誦できたのだろうか

繰り返し

考えずにただ繰り返す

それが蓄積されると

物事は叶えられる

(まさか そんなことはない)

そう聞いてはいたが

あれは夢だったのだろうか

とうに半世紀以上も過ぎたのに

未だ

何ひとつ

見えてはいない

何かから逃れようと

不健康な体躯を隠す器を探しはじめる人がいる

キッチンの窓際に置かれ

西日にさらされてきたガラスの瓶

見慣れたモノ

そこに逃げてはいけない

あなたは

その中で耐えられるはずもない

小さな注ぎ口の前で

深い悲しみに打ちひしがれるだけだ

気付いているのに

あなた

も

わたし

も

ワタシ

も

アナタ

も

どちら側になってみたところで

呻き

うめく

ウメイテイル

ひとびとは

佇むことをやめ

徐々に

実に美しく変わっていく

後ろに長くできていた自らの翳を

いとも簡単に屠^{ほふ}る術^{すべ}を以って

願っていたことだが

ああ

遅すぎたかもしれない

ふふっ

と笑って

思いつきり弾け飛ぶ

そんな

素敵な自分になるには

生活の柄(16)

横山 仁

蚊取り線香を焚いていても、パソコンで作業していると、いつの間にか蚊にさされている。

庭にある、雨水などの貯まったバケツやボールなどで蠢くボウフラ。ヒトスジシマカという黒い縞のあがるヤブ蚊の発生源を、これまでひっくり返していたが、今年は、金魚の餌にすることにした。少量の塩素系の漂白剤や十円銅貨でも死ぬらしい。

小学校(坂の上にあった)のあった街の側溝のアカムシ。角は文房具店だったか、揺れる藻のあいだで

上下していた。これは緑色のセンジュユスリカの幼虫で、蚊とは違い人を刺す吸血性はないらしい。

扇風機も、当然エアコンもない、遠い金鳥の夏。

丸い飯台には蠅帳はいむちようがかけられていて、少年の夏休みは、家の裏に父親が組み立てた小屋のござの上で寝ているものだった。

毎日1平方メートルに降り注ぐ8億個のウイルスを浴び、蚊にさされたところを掻きながら。

*ハリー今村氏の論考より

幸田文の「木」を読んだ

細部 俊作

幸田文（一九〇四—一九九〇）は、六七歳から八〇歳までの一三年間に、北は北海道から南は鹿児島県・屋久島まで、木のあるところを訪れて書いたエッセーを二〇回、当時の雑誌「学燈」に発表している。それを、没後二年目に娘の青木玉がまとめて出版したのがこの「木」である。

中身一五篇のうちの冒頭「えぞ松の更新」では、北海道・富良野の演習林内で、倒れ伏して腐れが進むえぞ松の上に、若い松が列をなして立ち上がっている姿に感動している。そして、場面や思いを展開させていく文章にキレ味を感じたし、一方で、例えば朽ちた木の亡骸のような部分を指で剥がしていく場面の描写は

細やかで目に浮かぶようだ。ああ日本語だなあ、いい文章だなあと思う。また、所どころに面白い表現があつて、たとえば、北海道はもみじしはじめていたや、ずくんずくんと立てならべてある、（小低木が）ひよひよと生きている（「藤」）などに、何ダ、コレ、新シイ！と思ったのだった。

*

「ひのき」には、アテのある木について書かれている。木は、環境からの外圧によって、コブやねじれなどのように変形させられてしまうことが多いという。作中にあるアテもその一つで、外圧に対抗するために幹や枝の中に自ら作った組織のこと。そのアテを見て、幸田文は「木の生きていく苦しみと、人の生きていく苦しみが、あまりによく似ているので、しきりに親身な感情が」動くのだと書いた。

製材業者にとっては、このアテのある材が、不格好で固く変質したり、ノコ挽きの最中から反りかえったり裂けたりする厄介もので、ワルなのだという。この言い分に幸田文はかなりの不満を抱く。木を見栄えや製材のときの厄介さでしかみないのはおかしい、アテ

があつてもなくても、命あるものとして、エリートの本と同等ではないか——。後日、その癖の強いアテの木を業者がノコ挽きしてみせてくれた。すると、アテは斜めに裂けてごろんと転がった。アテの正体を見せつけられた場面だが、「抱けば、その頑^{かたく}な重量。このアテをどうしたらいいかとだけ、あとは何も考えられなかった」と結んでいる。幼いもの、力のないもの、劣弱を負つて生きるものに強く共鳴する心を感じた。同時に、この終わり方は、とり繕わず、くだくだ書かなくて潔い。

*

「藤」に、父幸田露伴から叱られた話が入っている。植木市を見に行くなら孫娘を連れて行つて、草木への関心を開かせなさいと、父から勧められた。市を巡るうちに娘からこの藤の鉢植えが欲しいと言われたが、高価すぎたため別の木を選ばせ、結局山椒の木をもつて帰宅した。それを知つた露伴は、「多少値が張つたにせよ、子を選んだ藤を心の養いにしてやろうとなぜ思わないのか、その花からほかの花にも関心を広げ、いとおしむことを教えてやれば、この子の一生の心の

潤いにも楽しみにも、その子の財産にもなるものを」と徹底的にいわれたのだ。

このとき幸田文は三四歳前後。この時の親のまっとうな言い分の前に、忸怩たる思いがあつたようだ。三十数年後になつて、娘やその夫が花や木に親しむようになったことを知つて喜び、結果的に良いように落ち着いたことに安堵し、あらためて藤の花を見に出かけたのだつた。

*

木を巡る旅の後半になると、木そのものから、木を危険に陥れる自然災害にも関心を広げている。土砂崩れ、山林崩壊、火山灰による被害を見届けに現場に行く。一九七七年八月に北海道・有珠山が噴火した。それから二カ月ほど後に火山灰を被つた洞爺湖畔の林に足を踏み入れている。「なんとかわいそうなことだろう。八月、いきなり天から降つてきたものに打たれて、葉をもぎとられた時は気絶する思いだつたらう」、「広葉樹の山は惨憺たるものだった。裂け折れた柳の枝が、もうすっかり枯れたとしか見えぬのに、たった一本の枝先に、弱々とうす緑のおさな葉を立てていて——か

なしかつた。生きるか死ぬか、必死の秋なのである」
〔「灰」〕。

それまで何年も何か所もかけて、木への愛情を濃くしてきたせいか、被災して死の淵に立つ木々の前で悲嘆にくれそうである。そして落葉松からまつに向かつて「起きろよ、起きてごらんよ、とゆさぶる」。まるで倒れた人に駆け寄って抱き上げようとするかのようだ。

*

「木」の文章の魅力は、人をいとおしむように木を見、木の感情を汲み取るようにして木と語る、その書きぶりにあるようだ。たとえば「木というものは、こんなふうに情感をもつて生きているものなのだ」（えぞ松の更新）、「木の身になってごらんなさい、うらめしくて、くやし涙がこぼれます」（ひのき）、「生まれた所で死ぬまで生き続けようと、一番強く観念しているのは根にちがいない」（杉）、「見る目にいたましい我慢の集積である」（杉。屋久杉の根からの立ち上がり部分を見て）、「この木はどんな気持ちをしているかなあ」（この春の花）といったところや、「学問の上ではただそこに適応できる性質の木、というだけのことだ

ろうが、私は感情をもつて見るのである」（安倍晴にて）と書いているところにもそれが現れている。

幸田文は草木に関心をもったきっかけを「藤」のなかに書いている。住居が東京都郊外の農村地帯にあつて緑が身近にあつたことや、父・露伴が娘三人に同じ数本の木を与え、要点を示して管理を任せていたこと、父が木の葉を娘たちに見せて木の名前を当てさせ、これを競わせたこと。こんなふうに露伴は、娘たちが草木に親しむように仕向けていたのだという。このエッセーは、子供の頃から育まれた木との親密な日々を背景にして書かれたのだと分かる。

*

昭和の後期に、女性が営林署や製材業者、建設業者といった男社会の中に入つての取材は珍しげられたことだろう。齢七〇を越えた作家は、山で取材した相手から手を引かれ、後ろから押しもたらい、時に前を行く人のベルトにつかまり、はたまた、背負われて木の現場へ行つた。あまり飾らず、成り行きに意欲的に乗っかる性格なのではないか。本の終盤には、木造古建築に使われる木、各地の桜、

松、楠、杉を書いている。さすがにもう災害現場に行くことはなくなった。八〇歳の時に発表した「ポプラ」が最後に、マッチの軸木を製造する機械と、連動して出てくる軸木の賑やかで軽快な動きを見て連想したのが阿波踊りだったというから、何やらおかしみを感じた。

※幸田文の「崩れ」（講談社）は、自然災害に遭った現場に出かけたときのことを書いたエッセーだ。「木」とおおむね同じ取材が元にあつて、改めて書き起こしたようだ。この本も没後に出版された。

水田とツバメ（一九）

佐藤ただし

・イネとヒエ

私の住む家の近くで生まれ、目的を持って東京の学校に進学し、そのまま就職して暮らしていた若者が、勤めていた職場を辞め、四月の初めに実家に帰ってきただ。また、七月には地元勤めていた三〇代の若者が企業の事業閉鎖により退職し、再就職の道を探している。

新型コロナの影響は身近なところで起きている。レストランや学校給食で使用するコメの消費が伸びないため、今年のコメの値段も大きく下がるのではないかと心配している声も聞く。

世の中が大きく変わったのか、また元のような暮らしに戻れるのか、先が見えない。人が簡単に旅行に行っ

たり、食事をしたり、大勢で集まったりできないというのは、大げさに言えばこれまで人類が積み上げてきたものを大きく揺さぶるような出来事のようにも見える。新型コロナウイルスが目に見えないというのも厄介だし、感染した被害者が悪者にされる可能性があるというのも怖い。インフルエンザのようにワクチンが出来て、それを接種すれば問題が解決するのだというが、世界的には感染は広がる一方だし、解決には時間がかかりそうだ。

そうした中で、私はと言えば、去年と変わりなく、田んぼと畑にすることが多い。どちらも三密にはなりにくい場所だ。

田植えが終わると田んぼには人影がほとんどなく、イネの生育を見ながら、田んぼの水管理と畦の草刈りが主な仕事だ。今年は春先に低温の日が多く、イネが肥料を多く吸えなかったせいも、梅雨入り後に急に草丈がのびてきて、秋に倒伏する心配がある。毎年足腰のしっかりした丈夫なイネを作りたいと思ってやっているが、中々思い通りにはいかない。

イネは大体六月いっぱい一株の株数を確保し、そ

の後は、実を作るための準備に入る。一株三本から四本で植えた苗を二〇本から三〇本くらいの株数になるようにし、その本数を確保した頃に田んぼの水を抜き、田んぼを乾かす。そして、秋の収穫作業をし易くすると、イネの水管理をし易くするために、田んぼに溝切りをする。溝は溝切機という小型の機械を使い、幅一五センチ、深さも一五センチ位のV型の溝を作る。大体一五条から二〇条くらいの間隔で溝を切つてゆく。

そして、七月下旬から八月月上旬にかけて、イネの最後の葉（止葉）の次に穂が出てくる。出穂だ。星川清親著「イネの生長」（農山漁村文化協会・発行）によれば、イネは午前九時頃から開花が始まる。開花と言っても、イネには花弁はない。イネの穂には一本あたり九〇から一五〇粒くらいの籽が付いているが、この籽は二つの穎からできていて、開花時期になると、穎の内部で雄蕊の花糸が伸びて穎の内側に当たるようになる。そして雄蕊の花粉を包んでいる葯が割れて、花粉が飛散し、雌蕊は受粉する。同時に穎が開き、雄蕊が外に出て、花粉をまき散らし、他の開花した籽の受粉を助ける。この出穂の時に十分な水が必要と言われているた

め、田んぼに水を入れる。これを花水と言う。

この頃田んぼを歩くと、甘い香りがして好ましいと、会社員だった頃、職場の先輩から聞いたことがあった。それまで、何年もイネを作っていないながら気づかなかったが、確かに甘い香りがする。

一方、イネの穂が出揃い、頭を垂れるようになる頃、ヒエが急にイネの間から顔を出し、慌てることがある。今年も田んぼに草が無くて良かったと安心していたら、あつという間にヒエがイネの背丈を超えて広がり、景色が一変し、ひどい所だと、イネがヒエに飲み込まれてしまいそうなどころも見受けられる。こうした状況は最も避けたいところだが、ヒエは実にうまく田んぼの中で生きのびている。

田んぼに生えているヒエを総称してイヌビエと呼ぶ場合もあり、その逞しい成長の仕方を、田中修著「植物のかしこい生き方」（SB新書）には次のように書いてある。

『イネが大切に栽培される水田では、長い間雑草が子孫（タネ）を残して生き続けることは難しいことです。そこで、「イヌビエ」は周りを見ながらイネと共に

に生きる知恵を身に付けました。それは次の三つに要約できます。

一つはイネよりも少し遅れて発芽することです。イネより早く芽を出せば田植え前に土が掘り起こされる時に抜かれたり、埋められたりしてしまいます。そこでイヌビエは必ず田植えが済んだ後で芽を出します。

二つ目はイネより目立たないことです。芽を出すと、この植物の姿、形はイネと大変良く似ています。ですが、イヌビエの背丈は決してイネを超えません。そうすれば姿、形が似ているので抜かれることや除草の標的にされることになりません。

三つ目はイネより早く身を結実させ、まき散らしてしまうことです。イヌビエは夏にイネよりも早く花を咲かせ、タネを作ります。こうしておかなければ、稲刈りで刈られてしまうからです。稲刈りの時にまだタネが結実していない雑草は田んぼでは生きていけないのである。』

確かにイネとヒエは穂が出た後の姿は、はっきりと違うが、穂の出る前の違いを見分けるのは難しい。ヒエはイネと比べると少し葉の色が淡く、葉の生え際の

ところにイネは葉耳という短い毛と尖った葉舌があるがヒエにはない。

イネより少し遅れて発芽し、イネに似た容姿で陰に隠れて成長し、穂が出る少し前に追い越し、イネよりも早くタネを作り、まき散らす。ヒエは長い間、田んぼの中で暮らすうちにこうした性格を身に着けるように変化したという。こういったヒエの性格を作ってきたのは、田んぼという環境を作ってきた人間ともいえる。

今年もヒエ取りの季節がやってきた。ヒエは田んぼのあちこちで、存在感を示している。イネの生育を妨げないため、そして何より、見た目の悪さを少しでも良くするために、人間が作り上げたヒエという強敵としばらく付き合わなければならぬ。

雑記 (21)

横山 仁

前号でも紹介したが、武漢コロナウイルスにかんしては、YouTubeで、毎日のように科学者の武田邦彦先生が、PCR検査のインシキ性や、コロナの死者数とインフルエンザの死者数の比較などを数字をあげて解説しているので、不安な人はそちらをどうぞ。

また、後出のハリー今村氏が紹介している、免疫学の大橋眞・徳島大学名誉教授(免疫生物学)は、その診断(判定)基準に問題があるとしている(動画『コロナ騒動の原点は、PCR検査にあり』など)。これもまた、YouTubeの「学びラウンジ」(2020/08/29チャンネル登録者数1.77万人)で、解説をみることができる。

(引用開始) 8/14分

今回問題となっているPCR検査は、本来高い感度と特異性を有しています。それでは、一体何か問題なのでしょう。

ある地域で新しい感染症(新興感染症)が問題となつたとしても、この場合、第一にどのような病原体が感染症の原因になっているのかを突き止める必要があります。第二として、この病原体がどのような病変を引き起こして、どのような経過を取るのかについて明らかにする必要があります。他への伝播の危険性もここに含まれます。第三に、この病原体の検査法を検討して、適正化することにより、感染症の検査体制が出来ます。第四として、感染実態の把握のための疫学的調査です。感染経路を明らかにすることにより、感染症を予防する方策を立てることが出来ます。

今回は、クルーズ船がやってきて、急に診断体制をつくる必要が出たために、PCR検査を中国の発表した論文に基づいて、問題の遺伝子を高感度に検出するための検査法が作られました。しかし、この遺伝子と

似たウイルス等がすでに地域に存在していた可能性に関するチェックは見送られました。あくまで緊急の検査体制という意味では、やむ得なかったと思われます。しかし、当初は、感染経路の明らかな人や症状のある人に限られていた検査も、同じ検査システムのままで、無症状の人に広く行われるようになりました。その結果、このウイルスの本当の病毒性、伝播性のチェックも、交差反応性の検討もされないまま、検査を続けているわけです。中国発表の遺伝子と似ているというだけで、新型コロナウイルスとして、次々と隔離しています。病原体の検出をしているという保証はどこにもないことに注目する必要があります。ひたすらPCRの結果だけを盲目的に信じる形になっているのです。

今必要なのは、一体何の遺伝子を検出しているのかを調べることです。中国発表の遺伝子と似ているというだけで、感染者拡大と叫び、隔離、投薬、ワクチンの開発をするのは愚かなことではないでしょうか。

今回問題となっている感染症の問題において、無症状の人が感染源になるという話から、マスク、自粛、3密を避ける、イベント中止、新しい生活提案などの

問題につながりました。前回紹介した無症状の人が感染源になるという科学的論文は、実証的なものでなく、推測にすぎないのです。それでは、実際に無症状の人は、どのくらいのウイルスが検出されているのでしょうか。これについては、わが国では一切公表されていません。

中国の例が、世界的な医学雑誌のひとつNature Medicineに掲載されています。リアルタイムPCRのサイクル数で示されているデータを、ウイルス数に換算します。そうすると対数平均で、無症状者、有症状者ともに3-40コピーという値になります。このウイルス数では、他の人に感染させることも不可能であり、有症状者における症状も説明できません。すなわち有症状者の原因となっている病原体は、このウイルスではなく、一般風邪、インフルなど別のウイルスであると考えられます。また、すぐに感染が広まるようなウイルスではなく、PCR陽性者はすでに持っているウイルスが検出されたのに過ぎないと考えるのが妥当です。

マスコミ報道は、感染拡大や濃厚接触者などの表現により、このウイルスが非常に感染力が強いという印

象操作をしているようです。実際の実証実験や、実証に近い観察事項でないことに注目すること [か] 必要です。このように、非常に一方的に偏った報道は、国民をある方向に誘導する目的があると思われる。

無症状の人のウイルス数に関する論文 Clinical and immunological assessment of asymptomatic SARS-CoV-2 infections <https://www.nature.com/articles/s41591-021-0111-4>.. 症状の前にウイルスを出すという前回紹介した論文 <https://www.nature.com/articles/s41591-021-0111-4>..

(引用終わり)

(引用開始) 8/29分

今回の騒動で、遺伝子組み換えワクチンの接種が予定されています。このような新しいタイプのワクチンを、いきなり大人数を対象として接種することは、多くの問題があります。

そもそも、新しい感染症が広がっているという事実はあるのでしょうか。PCR検査をしないとわからないレベルの問題が、病気と言えるのでしょうか。病気とはいったい何なのかという定義の問題になります

が、普段の生活が何の問題もない人が病人であるという考え方は、正しいのでしょうか。このような健康上何の問題もない人が病人であるとする根拠は、無症状の人が感染源になるという話から来ています。この話でも PCR を使って創られたわけで、まさに PCR によって創られた感染症と言うことが出来るでしょう。

このように、健康上問題がないのに、謎のワクチン接種計画が進められています。日本が導入を決めたワクチンとして、ウイルスワクチンと mRNA ワクチンがあります。また、日本のベンチャー企業が、DNA ワクチンの開発を進めています。ウイルスワクチンは、ノンパンジーのアデノウイルスをベクターとして、新型コロナウイルスを組み替えたものであり、遺伝子組み換えウイルスです。DNA ワクチンは、大腸菌プラスミドという環状の DNA に新型コロナウイルスを挿入した組み換え DNA をワクチンとするものです。また、mRNA ワクチンは、新型コロナウイルスの RNA が mRNA として働くように改変し、アジュバントとしての機能を持った mRNA 本鎖をつないだものです。いずれも遺伝子組み換え体であり、このようなものを接種することにより、

将来どのような問題が起り得るのかということ、予測できないところがあります。効果の点についても、抗体が確認できたとする程度で見切り発車するようです。遺伝子組み換え食品を避ける風潮が強い日本人が、それよりも危険そうな遺伝子組み換えワクチンを恐れないのは、不思議なことです。

このような危険性を抱えたワクチンを検討する前に、本当に新しい感染症が拡大しているのかを検討するべきなのです。PCRを使わないと確認できないような事柄について、新しい病気が蔓延しているとするのは大きな問題です。感染症とは何なのか、病気とは何なのか、病原体とは何なのか、そして無症状者が感染源になるといふ科学的根拠はあるのか、といった根本的な問題を考え直す必要があります。

(引用終わり)

コロナの馬鹿騒ぎを、ハリー今村氏 (2020/08/08

(Sat) 08:08:43) が、かんたんに説明している。

(引用開始)

2020年8月6日現在
 シンコロ累計検査数 961915件
 シンコロ累計陽性者数 43152名 (4.5%)
 シンコロ累計死者数 1032名 (0.1%)

通常モードで正月に餅などを喉に詰まらせて亡くなる死者数が1300人ほど

インフルエンザでは年間1万人がお亡くなりになる
 シンコロは餅の足元にもまだ及ばないし

インフルエンザまで行くには

このペースだとシンコロ死者数が半年で1000人
 年間2000人として5年はかかる

*

「マスクは症状がある人が使う」

厚生労働省 経産省 消費者庁
 つまり マスクは症状が無ければ使わなくていい

無症状の感染者→ノーマスクOK

なんだよ ちゃんと言ってくれてるじゃん
国民の側が勝手にマスク警察化して馬鹿じゃね?》

*

「人類史上最大の医療詐欺 ウソコロナインチキパ
ンデミック」

目的は遺伝子組み換えワクチン強制接種?

一説によればこのワクチンを打たれた者は
潜在意識との接続を絶たれ
意識と無意識のみの奴隷ロボット化
あるいは副作用で病人になり医療利権に貢献
あるいは人口削減に貢献

人類に残された道は二つ
服従するか
反抗するか》

(引用終わり)

悪夢の民主党政権のエザイデンスが、またみつかった。へっぴりごしさん 2020年 08月 20日(木)より。
【極悪組織・財務省の掌で踊った民主党】感染症対策
が後手になる社会を作ったのは連航】。

(引用開始)

うさぎますくさんツイートから～

よく読むと感染症対策事業仕分け、国民の声は「賛
成はごく少数」「反対する意見がほぼ全て」とあるの
に民意を無視して民主党政権が予算削減を強行した
民主党政権は削ってはいけない国のインフラ、冗長
性、安全装置を事業仕分けという人民裁判で破壊した
基礎科学の体力が削がれた事も決して忘れない
(引用終わり)

あとがき

◆県立博物館の「蓑虫山人」展。明治の“漂泊の画人”とあった。逗留先の素封家との宴や風景に本人も描かれていて愛嬌がある。県内旦那衆の財力や地名、時代性など興味深かった。ふと芭蕉、真澄、蓑虫、山下清で共通するのは知名度、ネットワーク、健脚・健康か、などと思ひ浮かび一人笑い。(同展は8月23日で終了。)(B)

◆「木」は新潮文庫で読み始めたが、文字が小さくて続かず、途中で図書館から単行本(幸田文生誕100年記念の2004年版)を借りてきた。こちらの方がだいぶ目に楽だった。(S)

◆秋田市のカモシカ被害対策協議会という会合に出席した。各地区の委員からカモシカの発見や被害状況の報告があったが、一様に被害は少なかったようだ。代わりにニホンジカやイノシシが出没する地区があり、農作物が食べられているという。農地の耕作放棄や林道の放置がこうした動物の出没する範囲を広げつつある。(T)

◆コロナのおかげで、池上彰という、政府の借金(=国民の財産)も国(民)の借金もわからない(財務省に忖度か?)アホの講演会が中止になったという。めでたしというべきだろう。【ロイターWeb】記事9/3によれば、「消費税10%、教育無償化に使われており必要=菅官房長官」とのこと。こうした嘘も、財務省に忖度か?「媚中派」の二階の影は? 菅とアイヌ利権とチュチェ思想の関係は?(J)

「海市」第21号

2020年9月11日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方